

## 日本学術会議会員当選にあつて

正員 工学博士 千 秋 邦 夫

今度行われました第4期日本学術会議会員選挙に際し、土木学会その他から御推薦を受け立候補したところ、会員各位の御支持を得て、幸いにも当選させて頂きましたことを深くお礼を申し上げます。

日本学術会議に対し従来とかくの批評がありました。そのうちで最も重大と考えられる問題の一つに「一体学術会議は何をしているのであろうか。多額の国家経費を使用しているようだが、われわれ有権者にはほとんどわからない。まして国民は全然その存在を知らないのは当然であろう」という声があります。今までの日本学術会議の経過から考え当然起きてくる疑問であります。一般の国民に強く印象づけられてあることは日本学術会議のなした功績よりも、むしろ逆に前回の選挙の折に発生した選挙違反事件であります。こ

のようなことは日本学術会議自体も、また会員自身も深く反省し、その設立の目的である「わが国の科学者の内外に対する代表機関として科学の向上発達をはかり、行政産業および国民生活に科学を反映浸透させること」を実現させねばなりません。

日本学術会議が設立されてすでに満8年を経過し、この間国際学術会議その他外国との科学文化の交流に対しては、わが国の代表者を派遣する等、相当の成果を収めています。特に現在行われている南極観測隊の派遣は一般国民の熟知している重要なことです。しかし国内に対する問題についてはどうでしょうか。科学の向上発達をはかることに対しては、日本学術会議は政府に対して幾多の勧告をしており、そのうちで実現されたものも多数あります。しかし科学の向上発達だけではその設立

の目的を果しておりませんし、また日本学術会議のような組織が無くとも文部省の機構でできうることで、最も大切なことは科学を行政産業並びに国民生活に反映させることですが、これは各省の所管事項に関係しはなはだむづかしい問題です。

しかしながらこの問題を放置しておくわけにはいきません。この問題を実現するには各産業に関係するわが国の学協会と緊密に連絡し、各学協会の意志を正しく総合して、これを強く政府に勧告せねばなりません。土木学会としても土木工学の向上のため、また土木業界の発達のため取り上げる問題が多数あると考えます。私は浅学ですが、この問題をとりあげて活動したいと思ひます。幸い私は過去において総理府科学技術行政協議会の事務局長をしていましたし、また現在科学技術庁の参与をしていますので、相当働かせて頂けるものと信じます。どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

## 御 挨 拶

正員 米 田 正 文

私は今回土木学会の御推薦により日本学術会議会員に立候補いたしましたところ、会員諸氏の絶大なる御支援により幸いに当選することができました。衷心感謝にたえません。

私は立候補の挨拶にも申し上げましたとおり、土木工学の進歩発展とその研究成果の土木事業面への浸透とその反射に重点をおいて努力いたしたいつもりであります。土木工学は他の工学、理学に比して、その進歩が遅れておるといわれております。特に最近の電気工学の進歩、原子力の発展等はめざましいものがあるが、土木工学面には残念ながら、それらと匹敵できないことを認めざるを得ないと思ひます。これは土木工

学は他の工学、理学の綜合であるという性格上、その基礎学の進歩が先決問題であるという事情にもよるものと思ひますが、これらの困難な条件を克服して、ぜひとも土木に関する研究の大幅な向上発達を推進しなければならぬと思ひます。このためには研究所の拡充、研究員の養成、予算の確保、研究の能率化等多くの問題があり、さらにこの研究の成果を土木事業に浸透させなければならぬ。今日のところ遺憾ながら研究室と現場とが十分なる連絡がとれているとはいえない実情にあると思ひます。研究成果の速かなる実地応用こそ再び研究室の研究を促進するという反射作用を起すものであ

る。かくて研究と事業実施面とが因となり果となつて雪ダルマ式に膨脹発展することを望んでやまない次第であります。

第二には技術者の待遇の問題であります。この問題は欧米各国においてはすでに技術者のコンサルタントエンジニアの組織等ができていて技術的権威と社会地位とを確保している。技術者の地位の安定によつて技術は進歩し向上するものであつて、この問題は科学技術振興の基本条件であるからであります。土木工学面における問題は山積しており解決を急ぐものが多いのであるが、私は以上の問題を解決するよう極力努力いたしたいと思ひますので、会員諸氏の御指導御援助を期待してやまない次第であります。以上簡単ながら御挨拶といたします。